M

y

W

O

R

L

D

||

Y

O

U

R

S

O

N

G

登場人物

藤原　秀人（ふじわら　ひでと）
二十歳男性。短大映画学科所属。

工藤　唯（くどう　ゆい）
二十歳女性。短大映画学科所属。

広崎　七実（ひろさき　ななみ）
二十歳女性。短大映画学科所属。

森元　研介（もりもと　けんすけ）
四十五歳男性。大学講師。映画学科担任。

火野（ひの）
秀人の同級生。

古池（ふるいけ）
秀人の同級生

○　昼　学内食堂

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十五時」

壁に上映会『劇と蜜』のポスターが貼られている。

ポスターの『会場：地下一階エスポワールホール』がペンで塗り消され『会場：天神公園劇場』に書き換えられている。

秀人、テーブルでカップラーメンを食べている。

壁のテレビから、通り魔事件の犯人死刑執行に関するニュースが流れる。

秀人　「え。」

秀人、顔を上げ、テレビを見る。

秀人　「タイミングぴったりじゃん。」

唯、食堂に入り、秀人を見つける。

唯、秀人に近づく。

唯　「こんなとこいたんだ。」

秀人　「おお、おっつー。」

唯　「おっつーじゃないよ。みんなもう集まりだしてるのに。行かないの？」

秀人　「磯部たちいるから大丈夫だろ。オレもう実行委員長じゃねえし。森元にも会いたくないし。」

唯　「あれに関しちゃ森元が悪いでしょ。いくら何でも言いがかり。今に始まったことじゃないけど。」

秀人　「まあいいじゃん。それがこの国での立派な大人ってやつらしいよ。あのおっさんが自分で言ってたわ。」

唯　「そうだ。あれどうなったの。何だっけ。送別会。」

秀人　「あーいや。やらないかも。火野たちが来れないかもだって。」

唯　「そっか。残念。」

秀人　「別に遠慮しないで飲み会とか行ってくれてもいいよ？」

唯　「アタシ、アンタと違って友達いないから。」

秀人　「そうだった忘れてた。」

磯部、食堂に入り秀人に駆け寄る。

磯部　「藤原！」

秀人　「ん。」

秀人、顔だけ磯部の方を向く。

秀人　「どした。ってか何してんの？上映会は？」

磯部　「そうだよ！上映会もう始まるから！データ早く！」

秀人　「え？」

磯部　「オマエのあの完パケのデータがない

と始まんないんだって！」

秀人　「こないだハードディスク編集室に持ってったよ。あのいっつも使ってるパソコンのとこに。」

磯部　「うそ。」

秀人　「えまさか。」

磯部　「なかった！」

秀人　「嘘だろ！」

秀人、立ち上がる。

唯　「え、完パケってあれ？ヒデが作ったドキュメンタリーのやつ？」

磯部　「そう！」

唯　「こないだ一緒に持っていったじゃん！」

磯部　「こないだっていつ？」

唯　「一週間か十日前ぐらい前！」

秀人　「クッソ何で無くなってんだよ！」

磯部　「パソコンの中にないのか？」

秀人　「あるけどパソコン家に置いてきたわ。ってか完パケはもうハードディスクの中にしかない。上映会何時からだっけ。」

磯部　「あとちょうど一時間。」

秀人　「今から編集し直すか。いや一時間で行けるか・・・？」

唯　「よし！」

唯、立ち上がる。

唯　「タイムスリップしよ！」

秀人、磯部、固まる。

秀人　「へ？」

唯　「磯部ごめん。絶対本番までに間に合わせるから、少し時間ちょうだい！」

磯部　「へ？」

唯　「編集室で待っててて！」

唯、秀人の手を取る。

唯　「行くよ！」

唯、秀人を連れ走り出す。

秀人　「え、ちょっとどこに！」

○　同日　学校前道路

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十五時二分」

唯、秀人、学校から外に出てくる。

唯、止まり秀人の方を向く。

唯　「ヒデよく聞いて。今からタイムスリップするから！」

秀人　「へ？」

唯　「信じられないと思うから今から見せる！」

唯、カバンから花びらと水が入ったスプレーボトルを取り出す。

唯　「なんか適当に思い浮かべて！昔の記憶！何でもいいから！」

秀人　「いやちょっと何言ってるか分かんねえ」

唯　「（遮りながら）いいから早く！」

秀人、戸惑った表情をする。

秀人、目を閉じ、深呼吸をする。

秀人M「昔の記憶。昔の記憶。昔の記憶。」

唯、スプレーボトルの水を秀人に吹きかける。

秀人　「へ、何これ。」

唯、秀人の手を取る。

唯　「大丈夫。じっとしてて。」

秀人、意識が遠のき気を失う。

○　夕方　学校前路上

T　「二〇〇三年　一月二十六日　十七時五十五分」

秀人、壁にもたれながら倒れている。

秀人、目を開ける。

秀人　「え。」

秀人、立ち上がり周囲を見渡す。

周囲の人間が全員ガラケーを使っている。

秀人　「え、何これ。」

唯　「おはよ。」

唯、秀人の後ろから話しかける。

秀人、唯に振り向く。

秀人　「おいこれどうなってんだよ。」

唯　「はい。これ見て。」

唯、秀人に新聞を渡す。

秀人、受け取る。

新聞に、二〇〇三年一月二十六日の日付が載っている。

秀人　「二〇〇三年・・・。」

唯　「さっき思い浮かべた昔の記憶、これであってる？」

秀人　「え、いや、ああ。」

秀人、振り返り、周囲の人間が使っているガラケーを見る。

秀人　「ほんとだ。合ってるわ。ちょっと違うところもあるけど。」

唯　「オッケー。じゃあ、もう一回。また別の記憶思い浮かべて。」

秀人、目を閉じる。

唯　「いい？」

秀人　「ああ。」

唯、秀人の手を取り、スプレーを吹きかける。

秀人、意識を失う。

○　朝　学校前路上

T　「二〇一〇年　九月五日　八時」

財布を持った子供が道を走っている。

子供、転び財布を落とす。

財布から小銭がこぼれ、金属音がなる

秀人、金属音で目を覚ます。

秀人　「ん。」

秀人、立ち上がる。

車道の信号が青に変わる。

車が走り抜ける。

唯　「ヒデ！」

秀人、振り向く。

唯、アイスを持って秀人に歩み寄る。

唯　「はい。」

唯、秀人にアイスを渡す。

○　同日　学校中庭

T　「二〇一〇年　九月五日　八時五分」

秀人、唯、中庭のベンチに座りアイスを食べている。

唯　「この学校、セキュリティこんなガバガバなの昔からなんだね。」

秀人　「そだな。ま、大学ってそんなもんじゃね。」

唯　「だね。」

秀人、唯、少し無言になる。

秀人　「いやー！なんかまだ実感わかねえなー。マジでタイムスリップとかしちゃってんのかよオレら！こういうのってもっとこう、なんか電車とか乗ってやるもんだと思ってたわ！」

唯　「まあ、慣れちゃえば大丈夫だよ。」

秀人　「いやまあ、そうかもしんないけど。すげえな。やっぱりあれ？これで学校のテストの中身見たり芸能人の不倫とか見たりできたの？」

唯　「いや、できなかった。これ未来には行けないの。」

秀人　「あ、そうなんだ。」

唯　「ちなみにすっごい昔にも行けない。自分が生きてた時間だけみたい。」

秀人　「へー。やっぱ四次元道具みたいにうまくはいかないんだ。」

唯　「これでさ！ハードディスク探そ！過去に飛んじゃえば時間いっぱいあるし！きっとすぐ見つかるよ！」

秀人　「そうだな！」

秀人、勢いよく立ち上がる。

秀人　「やってやろう！」

唯　「あ、意外とすんなりなんだ。」

秀人　「まあ、わかんねえこといっぱいあるけど、このままだったら卒業制作ぶち壊し確定だし！やるしかねえだろ！」

唯、立ち上がる。

唯　「そうだね！行こう！」

秀人　「え、ってか大丈夫なんだよな。未来変えるようなことして。」

唯　「急に不安になるじゃん。大丈夫。今までも大丈夫だったし、大統領暗殺とかしなければ大丈夫！だと思う！そんときはそんときで行こ！」

秀人　「よし、とりあえず昔のこと考えりゃいいんだろ。」

唯　「あ、そうだ。確かにそれが大変かも。」

秀人　「へ？」

唯　「思い浮かべてる記憶が鮮明じゃないとうまく飛べないし、今日は二人でやってるから、二人分の記憶が影響しちゃってちょっとズレちゃうの。」

秀人　「ああ。確かに（周囲を見ながら）ちょっと違う部分あるな。」

唯　「今アタシ何も考えずに飛んだんだけど、それでもやっぱり完璧にはいかないから、出来るだけしっかり思い出して。特定の記憶思い浮かべるの結構難しいから。」

秀人　「オッケーだ。やり方は大体わかった。」

唯　「ごめんね。説明長くなっちゃった。」

秀人　「大丈夫、時間ならある。何回でも飛んだらいい。」

唯　「ひゅー。ノリノリじゃん。」

秀人、目を閉じる。

唯、香水を手に取る。

唯　「いい？」

秀人　「ああ。」

唯、香水を吹きかける。

○　昼　学校中庭

T　「二〇二〇年　七月七日」

秀人、目を覚ます。

秀人　「暑っ。」

秀人、立ち上がる。

秀人　「今いつだ。」

唯　「とりあえず編集室行ってみよ。」

唯、校舎に向かって走り出す。

秀人、追いかける。

○　同日　B棟三階廊下

唯、秀人、階段を駆け上り、廊下に着く。

秀人、最奥の部屋に向かい走り出す。

唯　「待って！（ひそひそ声で叫ぶ感じの声）」

唯、秀人と引っ張り止める。

秀人、後ろ向きに倒れる。

秀人　「痛って！」

唯　「しー！」

秀人、顔を上げる。

唯、手前の教室を覗いている。

秀人、唯の後ろから教室を覗く。

過去の秀人が数人のクラスメイトに向かい上映会の説明をしている。

秀人　「（ひそひそ声）ああ、あれだ。実行委員になった時だ。」

唯　「（ひそひそ声）あれ確か七夕の日だよね？」

秀人　「確かそう。あー。上映会のイメージしたからこんなとこに来たのか。」

過去の秀人　「だから、まあ今年は色々あってみんなも好き放題できなかったしさ！この二年間の、まあ集大成的なものにしたい！」

唯　「なんで実行委員になんかなったの？」

秀人　「いや、まあ。誰もやりたがらなかったし。にしても、『二年間の集大成』

とか、イタいなアイツ。」

唯　「いやアンタだっての。」

秀人　「よし。そろそろ恥ずかしいからとりあえずここを出よう。」

唯　「あいよ。」

秀人、目を閉じる。

唯、香水を吹きかける。

○　昼　学校中庭

T　「二〇一九年　四月五日」

スーツ姿の生徒たちが並んでいる。

秀人　「って入学式じゃねえか！」

唯　「どんなイメージしたの。」

秀人　「あれだ。さっき『二年間の集大成』とか言う単語聞いたからだ。」

唯　「やばい！」

唯、秀人を引っ張りベンチに隠れる。

秀人　「痛いって！」

唯、ベンチから生徒たちの方を見ている。

秀人　「なに、今度はどうした。」

唯　「昔のアタシたち。」

秀人　「え。」

秀人、唯の隣から覗く。

秀人　「うわーほんとだ。若っ。」

過去の秀人がスマホを触っている。

過去の唯、過去の秀人の背後から話しかける。

秀人、過去の二人が会話しているのを見ている。

秀人　「なあ、あの時さあ、」

秀人、話しながら唯の方を見る。

唯、野良猫を撫でている。

唯　「（ニヤニヤしながら）おほほー、何よー、ここがいいの？ここがいいの？えへへへー。」

秀人　「いや何してんだ。」

唯、ハッとした表情。

唯、両頬をはたく。

唯　「失敬、取り乱した。あっ！（指差しながら）火野くん！」

秀人　「えっ。」

秀人、唯が指差した方を見る。

過去の秀人と唯と火野が話している。

秀人　「あーそうだったわ。入学式の日だったわ。古池と出会ったのって、あれだっけ？また別の日だっけ？」

唯　「そ。専攻が別れた時。」

秀人　「あーそうだったそうだった。」

秀人、唯、過去の自分たちを見つめる。

秀人　「ちげーんだよ！思い出に浸りに来たんじゃねえんだよ！」

唯　「そうじゃんやばいやばい！」

唯、香水を取り出す。

唯　「はい行くよ！」

唯、香水を吹きかける。

大学の正門前に高級車が止まる。

車から阿久根が降りてくる。

阿久根、大学に入ってくる。

過去の火野、それに気づく。

過去の火野「うわ。」

過去の秀人「なに、どうした。」

過去の火野「阿久根だ。」

過去の秀人「あくね？」

過去の火野「プロダクションの社長。確かこの辺に本社があるんだ。」

過去の秀人「へー。あれか、来賓とか言うやつか。」

過去の火野「だろうな。」

過去の唯「あのおっさんこの辺の学校とズブズブらしいじゃん。」

過去の秀人「へー。」

過去の唯「あんまりいい噂聞かないけど。」

過去の火野「この学校の映画学科もあのおっさんが作らせたらしい。」

過去の秀人「マジで、オレ映画学科なんだけど。」

過去の唯　「アタシもだよ。」

過去の火野　「オレも。」

過去の秀人　「マジで？スッゲー偶然！運命じゃん！」

三人、笑う。

過去の秀人　「いや少女漫画か。」

○　夕方　B棟三階廊下

T　「二〇二〇年　六月十四日」

秀人、唯、廊下から教室を覗いている。

過去の秀人が過去の大野、園森、永田、岡田に囲まれている。

秀人　「うーわ最悪なとこ来ちゃった。」

唯　「何やってんのあれ。」

秀人　「ほら。堂園たちにわけわからん説教受けたって話したじゃん。」

唯　「ああ、あれね。」

過去の秀人　「はいはいわかった。」

尾野　「わかってない。わかったふりしないで。オマエのために言ってるんだよ？」

堂園　「オマエの評判がこの学校の評判になるんだよ。周りの人間が同じ目で見られるの。大人ってそう言うもんなの。俺たちもそうやって生きてるの。」

永田　「大人の常識を教えてやってんだよ感謝しろ。」

唯　「なにあいつら。ブーメラン刺さりまくりだっての。」

唯、言いながら振り返る。

廊下奥の階段の踊り場で秀人が過去の火野と古池と話している。

唯　「って何やってんの！」

唯、秀人の元に走る。

秀人　「やーそうそう、もう大変でさ。」

過去の火野　「あ、そうだ。今からタピオカ行くけど来る？」

秀人　「あ、いや、いいよ。タピオカ苦手だし。」

過去の古池　「えーいいじゃん行こうよ。」

唯　「ちょっと、ヒデ。」

過去の古池　「あー！唯ちゃん！」

唯　「あー！優菜ちゃんじゃーん！ごめーん今からちょっとコイツと用事あるから！」

唯、秀人を引っ張りながら階段に向かう。

秀人、引っ張られながら火野と古池に手を振る。

秀人　「ごめんねー！また明日ー！」

過去の火野　「お疲れー！気をつけてなー！」

○　同日　　大学中庭

秀人　「いやーごめんごめん。急に話しかけられてさー。ってか、これ大丈夫？過去の人と話して未来変わったりする？」

唯　「まあさっきみたいにちょっと喋っただけなら大丈夫だと思うけど。って、そんなこと言いながらアタシたち未来変えるために今こんなことしてるんだけどね。」

秀人　「そーだった。ハードディスク探しに来たんだったすっかり忘れてた。」

唯、香水を見る。

香水の量が残り少なくなっている。

唯　「香水なくなってきちゃったから、ちょっと戻ろ。」

秀人　「ああ、オッケー。え、いつものでいいの。」

唯　「うん。思い浮かべてくれたらいい。元いた場所に戻るのは簡単だから。」

○　昼　廊下

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十五時一〇分」

秀人、唯、廊下を歩いている。

唯　「園森たち、入学した時からアンタにあんなことしてたんだね。」

秀人　「まあ、人間偏差値低い連中だしな。仕方ない。」

唯　「言ってくれればよかったのに。」

秀人　「オマエ巻き込んだってしょうがないだろ。気にするだけ無駄だって。」

唯　「だって、こないだの広崎が骨折したのだってヒデ何も悪くないじゃん！」

秀人　「ほら、ロッカー室。」

唯　「あ。」

○　同日　ロッカー室

秀人、唯、ロッカー室に入ってくる。

唯、ロッカーを開け、中から花が植えられた長靴とペットボトルの水を取り出す。

秀人　「うお、何それ。」

唯　「この花を水に浸けたらさっきの香水になるの。」

秀人　「へー。よくそんなもん見つけたね。」

唯　「見つけてないよ。サンタさんにもらったの。」

秀人　「へ？」

校内放送で上映会入場時間に関するアナウンスが流れる。

秀人　「やっべ。」

唯　「ハードディスクが先！」

秀人　「行こう！」

○　夜　B棟三階廊下

T　「二〇二〇年　十一月二日」

教室の中で過去の秀人と過去の園森が話している。

秀人　「しまった、何も考えずに飛んじゃっ

た。ってか何回この教室来るんだよ。」

唯　「仕方ないじゃん、編集室この奥なんだから。あの部屋に置いてたんでしょ？」

秀人　「そ。だから日にちさえ当てればあの部屋にハードディスクがあるはず。なんだけど。」

秀人、教室の中の過去の秀人を見る。

秀人　「あの様子だと今回もハズレだな。」

唯　「また園森あいつ・・・！」

秀人　「あれだ。広崎が左手骨折した日だわ。」

唯　「園森も広崎もどんだけアンタのこと悪者にすれば気がすむの・・・！」

秀人　「ん。まてよ。」

唯　「どうかした？」

秀人　「ここで待っててくんない？」

唯　「へ？」

秀人　「やらなきゃならないことあってさ。ちょっと行ってくる！」

秀人、階段に向かって走り出す。

唯　「え、ちょっと、ねえ！」

秀人　「大丈夫！未来に影響ない程度にするから！」

秀人、走って階段を降りる。

唯、心配そうな表情。

過去の秀人　「だから広崎が大丈夫だって言ったんだよ！」

唯、声に驚き教室を見る。

園森　「骨折してんのに大丈夫なわけねえだろ！」

秀人　「あの状況だけ見て骨折なんかわかる

か！本人が大丈夫って言ったら大丈夫だと思うだろ！」

園森「女が言う大丈夫は大丈夫じゃねえんだよ！そんくらい察しろ！実行委員だろうが！」

秀人「そもそも誰も実行委員やりたがってなかったからオレがやってんだよ！やろうともしなかったお前が偉そうにすんなよな！」

園森「言い訳すんな！全部！全部オマエが悪いんだよ！だいたいなんだ！あのクソつまんねえ作品！オマエには才能がねえんだ自覚しろ！人を惹きつけるような作品なら間違いなく俺の方が間違いなくうまい！なんだあのドキュメンタリーもどき！みにくいんだよ！ナレーションのBGM流しながら静止画のスライドショーの方がまだ見やすい！あんなもん客に見せんな！」

園森、机をたたきつけながらまくし立てる。

唯、園森を睨みながら香水を握りしめる。

○　同日　　大学中庭

唯、ベンチに座っている。

秀人　「お待たせー。」

秀人、CDショップの袋を持って駆け寄る。

唯　「おかえり。」

秀人　「わりー、ちょっと遅くなっちった。」

唯　「ねえ。」

秀人　「ん？あ、怒ってる？」

唯　「ヒデにじゃないよ。あいつら。」

秀人　「ああ、あいつらね。」

唯、立ち上がる。

唯　「アタシやっぱり許せない！偉そうに説教してこの二年間ヒデのこと悪人みたいに仕立て上げて、広崎が勝手に怪我したのもアンタのせいにしてさ！」

秀人　「唯。」

唯　「悔しいの！めちゃくちゃ悔しい！あんな奴らがこれからヘラヘラ笑って生きていくって考えただけで！」

秀人　「唯。」

唯　「あんなに馬鹿にされて傷つけられて！なんでヒデはいつも笑っていられるの！」

秀人　「唯！」

唯、ハッとした表情。

秀人、真面目な顔で唯を見ている。（怒った表情ではない。）

唯　「ごめん。」

唯、泣きそうな表情でうつむく。

秀人　「いや、そうじゃなくて。」

唯、顔をあげる。

唯　「え？」

秀人　「オマエが言ってることは全部正しい。
全部オマエの言うとおりだ。」

秀人、唯に近づき香水を取る。

秀人　「大丈夫。オレもオマエとおんなじだ。
あの連中を許したりはしないし、あ
いつらがこの世にいるだけで吐き
そうになる。」

秀人、唯に香水を見せる。

秀人　「だからしっかり、考えてっから。オレ一人じゃ無理だったけど、オマエがいてくれたらうまくいきそうだし。」

秀人、香水を持った腕を降ろす。

秀人　「思い出したんだ。」

唯　「え？」

秀人　「学校のエスポワールホールのプロジェクターが火吹いたことあっただろ。あの時だ。編集室にハードディスク持って行ったの。」

唯　「そうだったっけ。」

秀人　「ああ。森元がわけわからんぐらいブチ切れて実行委員長のオレの責任がどーだとか言ってやがった。」

唯　「そっちの記憶の方が強すぎてすっか

り忘れてた。」

唯、大学の外を見る

唯　「そうじゃん。それで急いでスクリーンあるところ探し回って上映会の会場あの劇場に変更になったんじゃん。」

秀人　「そう。最初から最後まで森元が調子乗ってた日だよ。」

唯　「あ！」

唯、秀人を見る。

秀人　「そ。あの時の記憶だったら今二人ともはっきり覚えてるから、すぐ行ける。」

唯　「すごい！よく思い出したね！」

秀人　「まあ知ってのとおり天才映画監督だからさ。」

唯　「あ！流れ星！」

秀人　「聞け。」

唯　「よし！じゃあ行っちゃお！昔のヒデに会いに行こ！」

唯、校舎に向かって歩き出す。

秀人、後ろからついていく。

秀人　「あ、それでさっきの園森の話だけど、この香水使ったいい『作戦』思いついた。」

唯　「もしかしたら同じこと考えてるかも。」

秀人　「マジで。」

○　昼　用水路

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十五時三十分」

広崎、天神公園劇場と反対側に向かって歩いている。

園森、大野、永田、岡田、他数人が前方から歩いてくる。

園森、広崎に気づき話しかける。

園森　「お、ミサキちゃんじゃーん。」

広崎　「ああ、みんな。」

広崎、園森たち、止まる。

園森　「あれ？どっか行くの？」

広崎　「うん。行くっていうか、今日は帰る。」

園森　「あ、上映会行かないの？」

広崎　「うん、ちょっと体調悪くてさ。」

園森　「ああそう。お大事にね。」

広崎　「みんな今から上映会？」

園森　「そうそう！卒業前最後にみんなで集まろうってなってさ。そうだ、大丈夫？左手。」

広崎　「うん、痛みも引いたし。もう大丈夫だよ。」

園森　「藤原のやつずーっと調子乗ってっからちゃんとこないだ説教しといたよ！」

広崎　「あ、そう。ありがとう。」

園森　「そうだ！今日アイツ絶対来るだろうからまた言っておいてあげる！二度とツラ見せないようにしとくよ。」

広崎　「園森優しいね。」

園森　「まあね！」

広崎　「じゃあ気をつけて。」

広崎、歩き始める。

広崎、歩きながら用水路を見つめる。

○　昼　　B棟三階廊下

T　「二〇二〇年　　十二月十四日　　十一時十

三分」

秀人、唯、編集室と階段から死角になる部分に座って隠れている。

過去の秀人、過去の唯、階段を上がってくる。

唯　「来た。」

過去の秀人、過去の唯、編集室に入る。

過去の磯部、走って階段を上がってくる

過去の秀人の携帯に着信が入る。

過去の秀人　「プロジェクターが燃えてるって！」

過去の唯　「うそ。」

過去の秀人、過去の唯、走って階段を降りる。

唯　「ずっと見てて気づいたけどアタシ走る時の動きなんか変。」

秀人　「それはいいだろ別に。」

秀人、立ち上がろうとする。

唯、秀人の手を握る。

唯　「待って。」

階段を駆け上る足音が聞こえる。

過去の広崎（左腕にギプス）、階段を駆け上がってくる。

唯、秀人の手を握ったまま。

唯　「あの女。」

秀人　「階段ですれ違った記憶ねえぞ。」

広崎、編集室に入る。

秀人、舌打ちする。

唯　「結局あの女かよ。」

唯、立ち上がろうとする。

秀人、唯と握っていた手を引く。

秀人　「待て。」

唯　「え？」

秀人　「取り返さなくていい。」

過去の広崎、ハードディスクを持って編集室から出てきて、そのまま走って階段を降りる。

秀人、唯、立ち上がる。

秀人　「今取り返したら歴史がだいぶ変わっちまう。未来から来てるオレたちが干渉したらまずいだろ。」

唯　「そうだけど・・・。」

秀人　「ここで広崎止めても意味がない。あいつが盗んだっていう事実のまま、さっきの『作戦』だ。」

唯　「ああ。」

唯、納得した表情。

唯　「あの女がワルモノのままぶっ叩くってことね。」

秀人　「そ。」

唯　「悪い人。」

秀人　「褒めんなって。」

○　同日　用水路の橋

過去の広崎、走って用水路に着く。

秀人　「しかしあの感じだと、上映会には来ないだろうな。」

広崎、ハードディスクを用水路に投げ捨てる。

広崎、息を切らしている。

広崎　「うっ！」

広崎、腹を押さえてうずくまる。

○　同日　　秀人自宅

秀人、部屋に入る。

秀人　「てなわけで！今日十二月十四日はオレの誕生日！過去のオレが地元のアホたちと出かけてる今のうちに編集し直す！」

唯　「（拍手しながら）よっ！」

秀人、パソコンを開く。

秀人　「あーあ、なんでパソコンに完パケ保存する癖がつかないんだろ。」

唯　「ねえ、ここ任せていい？」

秀人　「え？」

唯　「ちょっと行きたいところあるの。すぐ戻るから。」

秀人　「いいよ、気いつけて。」

唯　「ありがと。」

唯、秀人の部屋を出る。

唯、香水を吹きかける。

○　同日同所

秀人、パソコンで編集している。

時々カップラーメンを食べる。

○　同日同所

秀人、パソコンで編集している。

唯、いつの間にか隣で座って寝ている。

○　同日同所

秀人、編集ソフトのレンダリングのボタンを押す。

秀人　「（絞り出すような声で）できたぁ。」

唯　「おっつー。いぇーい。」

秀人、唯、ハイタッチをする。

秀人　「よーし！行こう！」

唯　「作戦かいしー！」

○　昼　天神公園劇場内受付

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十五時四十五分」

森元、スマホの着信履歴を見ている。

前日夜から今日にかけて広崎からの着信が数十件残っている。

森元、ため息をつきスマホをしまう。

園森たちが劇場に入ってくる。

園森　「あれ、森元せんせー。来てたんですか。」

森元　「ああ、ちょっとぐらい顔出さないとな。」

大野　「じゃあ森元先生も一緒に行きましょうよ！」

森元　「ん？何がだ？」

岡田　「上映会終わったらみんなで飲みに行くんです！森元先生も行きましょ！」

森元　「ああ、すまん。事情があってな。この後すぐ出なきゃならないんだ。」

永田　「そうなんですかー。卒業前最後なのに。」

森元　「ごめんごめん。卒業式の後にでも行

こう。」

園森　「絶対っすよ！マジで行きましょ！美咲ちゃんとかも呼んで！」

森元　「そうだな。広崎は難しいかもしれないが。」

園森　「さっき美咲ちゃんとすれ違ったんですけど、元気そうでした！」

森元、ハッとした表情をする。

森元　「来てたのか。」

園森　「あ、いや、体調悪いから上映会には来ないって言ってました。」

森元　「ああ、そうか。」

園森　「骨折もだいぶ良くなったって言ってましたよ。」

森元　「そうか。よかったな。」

秀人　「へー！広崎骨折良くなったのかー！」

秀人、上映ルームの扉を開けながら出てくる。

秀人、手袋をはめている。

園森たち、静まり返る。

秀人、悪意的な笑みを浮かべている。

秀人　「そりゃよかった。」

森元　「いつからそこにいた。」

秀人　「ずっといましたよ。元実行委員長として、最終チェックをしていたんです。」

唯（手袋はめている）、ジュースを載せたワゴンを押しながら通路を歩いてくる。

森元　「そうか。そりゃ結構だ。」

秀人、園森たちを見る。

秀人　「来たんだな、お前ら。ボイコットだの上映会中止だの喚いてた割に。」

園森　「偉そうにすんな。オマエの作品だけ

を見に来たわけじゃねえんだよ。」

唯、秀人の影に隠れてジュースに中に香水を吹きかけている。

大野　「できたわけ？あんなに大口叩いてた例の大トリ作品は。」

秀人　「ちょうどよかった。ちょっと事情があってな。セットリストが変わったんだ。」

大野　「は？」

秀人　「大トリにする予定だったんだけど、急遽最初に流すことになったんだ。」

岡田　「はあ？」

秀人　「最初だけだからさ。ちょっと我慢してくれりゃすぐ終わるから。まさか。」

秀人、劇場の入り口を見る。

秀人　「お客様がくるのに、最初から見てくれないなんてこと流石にしないだろ？」

阿久根、劇場に入ってくる。

森元　「阿久根社長！」

園森　「阿久根さん！？」

阿久根　「こんにちは。」

大野　「なんでここにいるんですか。」

阿久根　「そこにいる永田くんに招待を受けてね。」

園森　「永田？」

阿久根、永田の肩に手を置く。

阿久根　「来年うちの新入社員になる子にお呼ばれされちゃ断りにくくてな。」

阿久根、大きい声で笑う。

永田、愛想笑いをする。

阿久根、秀人を見る。

阿久根　「えーっと、実行委員長くんだったかな。」

秀人　「藤原と申します。」

阿久根　「永田くんに聞いたよ。外部の人間を呼ぶのは特例だそうで。」

秀人　「この上映会、準備中にアクシデントがあり一時は中止寸前だったのですが、どうしても阿久根様を招待したいというこの永田が尽力してくれたおかげで今日開催することができます。ありがとうございます。」

阿久根　「そうか、お手柄だな永田くん。」

永田　「いえいえ・・・。」

秀人　「さて、そろそろ上映開始です。」

唯、ワゴンを押しながら出てくる。

唯　「お飲物をどうぞ！」

唯、阿久根にジュースを渡す。

阿久根　「ありがとう。」

阿久根、ジュースを受け取り上映ルームに入る。

唯、園森にジュースを差し出す。

唯　「どうぞ！」

園森、ジュースを受け取り上映ルームに入る。

永田、岡田、大野、ジュースを受け取り上映ルームに入る。

唯、全員が着席したのを確認し、扉に手をかける。

阿久根　「ん？他に客はいないのか？」

唯　「生徒たちが到着次第こちらからご案内します。ちょっと早いですが、せっかくなのでもう始めちゃいます。ごゆっくり。」

唯、扉を閉める。

上映ルームの照明が落ちる。

秀人、唯、劇場の外に向かって歩き出す。

森元　「帰るのか。」

秀人、唯、止まる。

秀人　「はい。もう仕事終わりなんで。」

森元　「最後まで見届けたほうがいいんじゃないのか？」

秀人　「まあさっきはカッコつけましたけど、もうオレ実行委員長じゃないんで。」

森元　「あ？」

秀人　「『あ？』って。あんたが言ったじゃな

いっすか。よかったっすね。広崎元気になったみたいで。」

唯、森元に歩み寄る。

唯　「まあまあ二人とも、こんな時に喧嘩しないでください。」

唯、森元の手を取る。

唯　「ね。森元せんせー。」

森元、秀人に対して悪意的な笑みを向ける。

森元　「ああ、そうだな。」

森元、唯の手を離す。

唯　「（小声で）じゃ、また後で。」

唯、秀人の元に戻る。

秀人、唯、劇場から出て行く。

○　同日同所　　上映ルーム内

秀人が製作したドキュメンタリーが映されている。

登場人物が飲み物を飲むシーンが流れる。

それにつられ園森たちがジュースを飲む。

ナレーション　「あの事件の真相に迫る。」

スクリーンにニュース映像が映される。

十三年前に起きた通り魔事件の殺人犯が映される。

『本日、二〇二〇年十二月二十四日死刑執行』

とテロップが載せられる。

ナレーション　「十三年前の今日、かつて市

営公園だったここ天神公園劇場で、悪魔の大量殺人が起きた。」

十三年前のニュース映像が次々に映される。視聴者から送られた実際の殺人の瞬間の映像が流れる。

園森たち、全員釘付けになっている。

映像の中で、殺人犯が男性の頭を掴み首をナイフで切り裂いている。

園森、その男性と服装が同じであることに気づく。

園森、意識を失う。

○　昼　　天神公園

T　「二〇〇七年　十二月二十四日　十二時二十四分」

女性が叫び声をあげる。

園森、叫び声で目を覚ます。

園森、立ち上がり周囲を見る。

永田、岡田、大野、阿久根が血を流して倒れている。

園森、固まっていると後ろから殺人鬼に頭を掴まれる。

園森、殺人鬼に首を切られ死ぬ。

○　昼　　上映ルーム

スクリーンに園森が死ぬ映像が流れる。

上映ルーム内が全て空席になっている。

ナレーション　「二十人以上の犠牲者を出した殺人事件。亡くなった方のうちの数人は、いまだに身元が不明という謎も残っている。」

○　同日　　夕方　　白崎海浜公園

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十七時」

秀人、プレゼントボックスと香水を持って、唯からメモ紙を受け取る。

メモ紙に住所が書かれている。

秀人　「ホントにいいのか？」

唯　「うん。もう使わないし。疲れるんだよね時間旅行って。」

秀人　「まあそりゃ確かに。」

秀人、香水を自分に向ける。

秀人　「じゃ、行ってくる。」

唯　「行ってらっしゃい。気をつけて。」

秀人、香水を吹きかける。

○　冬　夜　工藤家の正門前

T　「二〇〇七年　十二月二十四日　二十一時」

粉雪が降っている。

秀人、玄関から少し離れた正門の前に立っている。

秀人　「さみー。」

秀人、『工藤』の表札を確認し、門の前にプレゼントボックスを置く。

秀人、両手に息を吐く。

秀人、インターホンを鳴らし、香水をポケットから取り出す。

ポケットから出す瞬間手が滑り香水を落とす。

秀人　「あ。」

玄関から七歳の唯が出てくる。

秀人、唯と目が合う。

唯、息を呑むような反応をし、秀人に向かって走り出す。

秀人　「やべ！」

秀人、慌てて香水を拾う。

秀人、香水を吹きかける。

秀人、唯が追いつく瞬間に消える。

唯、残念そうな表情をする。

唯、プレゼントボックスを見つける。

唯、プレゼントボックスを開ける。

中に花が植えられた長靴、香水が入ったボトル、メッセージカードが入っている。

唯、笑顔になる。

唯、プレゼントを持って玄関に走って戻る。

唯　「おばあちゃん！サンタさん来たー！」

○　夕方　　白崎海浜公園

T　「二〇二〇年　十二月二十四日　十七時」

唯の背後から広崎が近づく。

唯、気づいて振り返る。

唯　「あ、ごめんねー。急に呼び出して。」

広崎　「森元先生もいるって聞いたけど。」

唯　「もうすぐ会えるから。そんなに心配しないで。」

広崎、あきれたような表情。

唯　「もう大丈夫なの？」

広崎　「え？」

広崎、左手首のギプスを見る。

広崎　「もう痛みは引いたよ。卒業式には間

に合いそう。」

唯　「そっちじゃなくて。」

唯、広崎の下腹部を右手で指差す。

唯　「おなか。」

広崎　「え？」

唯　「だからおなか。っていうか、子宮？」

広崎、驚いた表情。

唯、それを見て口角を上げる。

唯　「大丈夫じゃなさそうだね。」

広崎　「なに。なんの話。」

唯　「気になったの。気になってたの。お前が怪我したあの日。」

唯、広崎が椅子から落ちる瞬間を思い浮かべる。

唯　「上映会の準備してたあの日、手伝うって言い出したのも、勝手に動いたのもお前。そして勝手に椅子から転がり落ちて勝手に怪我して、おかげで実行委員長のヒデは悪者扱い。」

唯、右手首を袖の上から撫でる。

唯　「なんでお前があんなに特別扱いされるのか、なんであんなに森元が必死だったのか分からなかった。どう考えても異常だもん。だから自分の力で調べたの。」

広崎　「調べたって何を。」

唯　「全部。最初から最後まで。」

広崎　「どうやって！」

唯　「あんまり声荒げないで。血圧上がるよ？」

広崎　「先生は何も言ってなかった！」

唯　「言うわけないじゃん。その程度の関

係なんだから。」

広崎　「オマエに何がわかる！」

広崎、下腹部に痛みが走り、右手で押さえる。

唯　「だから言ったのに。」

広崎　「うるさい！」

唯　「よかったね。骨折したのが左手で。」

広崎　「はあ？」

唯、広崎の右手首を右手で指差す。

唯　「お前がそのセンス悪いリストバンド
つけてる理由、当ててあげようか？」

広崎　「別に理由なんかない。」

唯　「（遮りながら）森元は不倫相手とセッ
クスした後、その女の右手首に根性
焼きみたいなのつけてくんの。キス
マークの代わりにね。それも唯の不
倫相手じゃなくて、コンドームつけ

なくても何も言わない忠実な雌豚にだけ。」

唯、右手の袖をまくる。

唯　「だから、」

唯、右手首を広崎に見せる。

唯の右手首に火傷の跡がある。

唯　「お前の右手にもこれがあるってわけ。」

広崎、絶句した表情。

広崎　「なんでアンタが。」

唯　「いやー楽勝だねあのおっさん。自分がいつまでも現役って勘違いしてる猿は扱いやすい。」

唯、袖を元に戻す。

唯　「昨日の夜、森元電話出なかったでしょ？お前が鬼電してる間、あのおっさんずーっとよだれ垂らしながら腰振ってたよ。お前からアタシに乗り換えようとでもしたんじゃない？あ、この場合乗り換えるの意味がややこしいな。」

広崎、腹を押さえてうずくまる。

唯、広崎に近づき、しゃがんで目線を合わせる。

唯　「あんたが特別扱いされてたのは、あんたが森元とやりまくって妊娠してたから。園森たちも知ってたのかな。あいつらはもういないけど。」

広崎　「なんで、そんなこととしたの。」

唯　「なに？そんなことって。」

広崎　「なんで先生に近づいたの。」

唯　「復讐のため。他になにがあんの。」

広崎　「そんなことのために、好きでもない相手に近づいたの。」

唯　「へー。好きとか嫌いって考え方してんだ。可愛いとこあるじゃーん。」

唯、広崎の鼻を指で小突く。

広崎　「違う！先生はアンタみたいな女には！絶対違う！」

唯　「さっきから薄っぺらーいことばっか言ってんね。自分も不倫してたくせに余所の女に寝取られたのがそんな悔しいの。」

唯、広崎の頬に手を当てる。

唯　「お前が椅子から落ちて、できたガキは流産して、森元なんて言ったと思う？『仕方なかった』だって。賢者

タイムでかっこつけながら、こう、タバコふかしながら、『仕方なかった』って。」

唯、広崎を嘲るような声で笑う。

唯、笑い終わり真顔になる。

唯　「許さないよ。ヒデに責任押し付けたのも、ヒデのこの二年間ぶっ壊したのも、全部お前らのせい。お前が流産しようが哀しもうが、森元が喜ぼうが知ったこっちゃない。お前さっき『そんなこと』って言ったけど、誰かの人生ぶっ壊しといてヘラヘラ笑ってるお前らよりは少なくともまともな人間性してっから。」

唯、口角をあげる。

唯　「でもアタシ優しいから。一回だけチ

ャンスあげる。」

唯、広崎の手を引き立ち上がらせる。

唯、ポケットからカードキーを取り出す。

唯　「今日の夜七時、森元の家で会うことになってるの。行ったことないでしょ？駅前にあるルアンノっていうマンション、あそこの四一三号室。」

唯、カードキーを広崎の手に握らせる。

唯　「アタシからの、クリスマスプレゼント。」

○　昼　空港　展望レストラン

T　「二〇二一年　三月十五日」

唯、席に着き景色を眺めている。

料理が運ばれてくる。

唯　「ありがとうございます。」

唯、受け取った流れでブックスタンドの新聞が目に入る。

唯、新聞を取る。

広崎の不倫相手殺害と自殺の記事が載っている。

その隣に小さく短大生集団失踪の記事が載っている。

秀人　「おまち。」

唯、秀人の方を向く。

唯　「おかえり。」

唯、秀人が持つ梅ヶ枝餅の袋を見る。

唯　「買いすぎでしょ。」

秀人　「近所じゃ買えねーからさ。」

秀人、席に着く。

唯、新聞を戻し席に着く。

秀人　「いただきます。」

唯　「いただきます。」

二人、食べ始める。

唯　「結局送別会できなかったね。」

秀人　「まあ仕方ない。引っ越しとか忙しそうだったし。」

秀人、ラッピングされたCDケースをテーブルに出す。

唯　「なにそれ？」

秀人　「火野にプレゼント。餞ってやつ。」

唯　「優しいじゃん。」

秀人　「まあね。」

唯　「まあ。」

唯、プレゼントをテーブルに出す。

唯　「アタシも優菜に渡すんだけど。」

秀人、唯のプレゼントを見る。

秀人　「これさ、」

唯　「ん。」

秀人　「二人で仲良く選んで買ったと思われないかな。」

唯　「嫌なのか。」

秀人　「ごめんなさい嫌じゃないです。」

秀人の携帯にスマホにメッセージが届く。

秀人　「火野たちそろそろだって。」

唯　「おっけー。」

○　昼　学校　B棟三階教室

T　「二〇一九年　十二月一」

生徒たちが授業を受けている。

生徒A　「ミュージックビデオだってよ。」

生徒B　「マジかー。めっちゃむずいらしい じゃん。担当あの鬼軍曹だし。」

生徒C　「絶対藤原と同じグループなりたくないわ。」

講師が生徒の前に立つ。

講師　「今からミュージックビデオの課題のグループ分けをする。くじを引いて

同じ番号同士で集まれ。」

生徒たちくじを引き、グループを作っていく。

秀人、唯、火野、古池、広崎、同じグループになる。

秀人　「やべえな。」

火野　「いけるっしょ。」

古池　「課題曲知らないやつなんだけど。」

唯　「どうせあの鬼軍曹の趣味でしょ。」

広崎　「私カメラマンやりたいです。」

火野　「オッケー。じゃあ担当決めていこうか。」

○　夕方　B棟三階教室

T　「二〇一九年　十二月十四日」

秀人、一人でコンテを書いている。

古池、教室に入ってくる。

古池　「おっつー。」

秀人　「おっつー。」

古池　「スケジュールもう好きに決めちゃっていいよ。」

秀人　「マジで。」

古池　「うん。年末予定ないから。」

秀人　「クリスマスも？」

古池　「うん。」

秀人　「だと思った。」

古池　「おい。」

○　夜　秀人自宅

T　「二〇一九年　十二月二十日」

秀人、火野と電話で話している。

火野　「今年、もう地元帰らないことにした。」

秀人　「え？なんで。」

火野　「オマエらに撮影丸投げして帰るわけにいかねえだろ。」

秀人　「オマエまじイケメン。」

○　早朝　秀人自宅

T　「二〇一九年　十二月二十四日」

秀人、寝起きでスマホを見る。

広崎から『体調不良で撮影に行けない。』とメッセージが入っている。

秀人　「いやマジで言ってんのかよ。」

唯から電話が入る。

秀人、電話に出る。

唯　「広崎が撮影来れないって！」

秀人　「オレも今メッセージ見た。カメラマンがドタキャンすんなよな。」

唯　「とりあえず優菜と合流してくる！」

秀人　「さんきゅ。オレもすぐ行く。」

○　同日　海岸

秀人、三脚を抱えて走りながら火野と電話をしている。

火野　「カメラ準備できそう！車も優菜たちがイケたって！」

秀人　「ナイス！マジでありがとう！」

○　同日　夜　駐車場

秀人、ハイエースの荷台に三脚を置く。

秀人　「はい撮影終了！」

古池　「おつかれー！」

火野　「おつかれー！」

唯、ケーキが入った箱を持って秀人たちの元にくる。

唯　「サンタさん登場！」

火野　「あざっす！」

古池　「マジでありがとう！」

○　昼　B棟三階教室

T　「二〇二〇年　四月」

秀人、火野、向かい合って座っている。

秀人　「なあ。」

火野　「ん。」

秀人　「オマエ彼女とかいる？」

火野　「いるよ。地元に。」

秀人　「告白ってどうやってやんの。」

火野　「告白すんの？」

秀人　「いや決まったわけじゃねえけど。」

火野　「誰に？」

秀人　「いっつもゼミで一緒になる人。」

火野　「あ、へー。」

○　昼　学内食堂

T　「二〇二〇年　五月」

火野、唯、同じテーブルで昼食をとっている。

火野　「てっきり唯ちゃんに告白すんのかと思っててさ。」

唯　「ああ、それ、フラれたんだって。」

火野　「マジで。」

唯　「マジで。ひどくない？『顔が嫌い』ってフラれたんだよ！」

火野　「『顔が嫌い』って言われたの？本人に向かって？」

唯　「そう！ヒデのことなんも知らないくせに！人の顔にどうこう言える顔してんのかよ！」

火野　「落ち着けって。」

○　昼　学内食堂

T　「二〇二〇年　六月」

唯、古池、同じテーブルで昼食をとっている。

唯　「ヒデもヒデだよ！あんなビッチにデレデレしちゃってさ！B専かってのの！」

古池　「あー、だから唯のこと好きにならないんだ。」

唯　「そりゃ誕プレなんてもらったら気があるんだと思うじゃん。」

古池　「誕プレもらったんだ。いいじゃん。」

唯　「なんかさー。もらえると思ってなかったから渡された時うまくリアクションできなかったんだよねー。」

古池　「あるあるだね。恋愛初心者の。」

唯　「うるさいなー。」

○　昼　B棟三階教室

T　「二〇二〇年　七月」

秀人、古池、向かい合って座っている。

秀人　「なあ。」

古池　「ん。」

秀人　「女子ってプレゼントとかどんなの渡したら喜ぶの。」

古池　「プレゼント？」

秀人　「そう。去年誕生日に唯に渡したんだけどさ、あんまり喜んでなかったんだよね。」

古池　「あー。」

古池、唯との会話を思い出す。

古池　「なんでも喜ぶと思うよ。」

秀人　「そうかな。」

古池　「うん。」

○　昼　B棟三階教室

T　「二〇二〇年　七月七日」

秀人、教室の前に立っている。

古池たちが席について聞いている。

秀人　「だから、まあ今年は色々あってみんなも好き放題できなかったしさ！この二年間の、まあ集大成的なものにしたい！」

唯　「はい実行委員長！集大成って具体的にはどういうやつですか！」

秀人　「愛と勇気と努力と友情と勝利！」

火野　「おもんな！」

秀人　「思い出づくりだ！卒業制作なんだから好き勝手やったほうが楽しいだろ！」

古池　「はい実行委員長！上映会当日ワタシと火野は東京に行かなければなりません！」

秀人　「マジで。」

古池　「うん。マジ。本当にごめん。」

唯　「仕方ないじゃん。夢があるんだし。」

秀人　「そだな。わかった。じゃあ当日はオ

マエらの作品も全部責任持って放映する！」

○　夜　秀人自宅

T　「二〇二〇年　十一月一日」

秀人、火野と電話している。

秀人　「おっつー。どうすか東京は。」

火野　「いやまじ人多い。そしてものの値段が高い。昼飯代が百倍くらいする。」

秀人　「うーわ、絶対東京とか行きたくない。」

火野　「しかもさー、今日新しいアルバムの発売日なのにもうこっち売り切れてたわ。」

秀人　「マジで。明日時間あったら見てみようか。」

火野　「いやいや、無理しなくていいよ。人

気だからすぐ売り切れちゃうし。」

○　夜　　B棟三階教室

T　「二〇二〇年　十一月二日」

秀人、園森、向かい合わせに座り口論している。

園森　「広崎が骨折したのも全部オマエの責任だ！もし広崎に後遺症でもあったらどうするつもりだ！上映会だって中止になるかもしれないのに！」

園森、机を叩きまくし立てる。

未来の唯が教室に入ってくる。

秀人、驚いた表情。

秀人　「唯。」

唯　「おっつー。」

唯、秀人の手を取り立ち上がらせる。

唯　「帰るよ。」

園森　「ちょっと唯ちゃん。」

唯　「それ以上喋ったら。」

唯、園森の方を見る。

唯　「お前が優菜にフラッシュモブまで用意したのにフラれた話ドキュメンタリーにして上映会で流すからな。」

園森、混乱した表情。

唯　「ごめんね。なんでもわかるの。タイムマシン持ってるから。」

唯、秀人の手を引き連れ出す。

○　同日　　学校中庭

唯、秀人、ベンチの前で止まる。

秀人　「サンキュ。助かった。」

唯　「ごめんね。いても立ってもいられなくて。早く帰りたかったでしょ。」

秀人　「まあな。ちょっと行きたいところあったし。」

唯、ベンチに座る。

秀人　「いいよ、行っておいで。ちょっと休んでから帰る。」

秀人、一瞬考える表情をするが、すぐに唯を

見て笑う。

秀人　「ありがとう。」

秀人、学校の外に走り出す。

○　同日　CDショップ前

秀人、走ってCDショップに着く。

看板に、『BROKEN　COMPASS』売り切れと書かれている。

秀人　「くっそー！間に合わなかった。」

秀人の後ろを、ラッピングされたCDを持った未来の秀人が通り過ぎる。

未来の秀人　「買えた買えた。」

○　昼　空港　出発ロビー前

T　「二〇二一年　三月十五日」

秀人、唯と、火野、古池が向かい合って立っている。

秀人、唯、プレゼントを差し出す。

秀人　「はいお別れのプレゼントってやつ。」

唯　「アタシたちだと思って可愛がってあげて！」

火野、古池、受け取る。

古池　「やっぱ、マジありがとう！」

火野　「え、これもしかして。」

秀人　「まあまあ、向こうに着いたら開けてみて。」

火野、察した表情。

火野　「ほんっとありがとう！大事にするわ！」

飛行機出発のアナウンスがなる。

秀人　「悪い、喋りすぎた。」

火野　「いいよ。ちょっとぐらい待ってくれるっしょ。」

古池　「じゃ！生きてまた会おうぜ！」

唯　「おう！」

○　同日　空港展望台

秀人、唯、手すりにもたれかかり滑走路を見ている。

唯　「あー、やばい。これ後でさみしくなるやつだー。」

秀人　「死ぬわけじゃないんだから。」

唯　「わかってるけどさみしいの！」

秀人、飛行機を見ている。

秀人　「なあ。」

唯　「ん。」

秀人　「アイツらさ。オレと一緒にいて学生生活楽しかったのかな。」

唯、秀人の横顔を見る。

秀人、無表情で滑走路を見ている。

唯　「アタシは楽しかったよ。」

火野たちが乗った飛行機が滑走路に出る。

唯　「アンタと一緒にいられて。」

秀人、唯を見る。

唯、それを見て微笑む。

唯　「ま、これからも一緒にいてあげる。」

秀人、笑う。

唯、それを見て笑う。

唯　「あ。」

唯、飛行機を指差す。

唯　「あれだよ。」

秀人、飛行機を見る。

飛行機がスピードを上げる。

唯　「行っちゃうね。」

秀人　「行っちゃうな。」

飛行機が離陸する。

学生時代の光景がフラッシュバックする。

秀人、息を吸い込む。

秀人　「がんばれー！」

飛行機が見えなくなる。

秀人、清々しい表情で見ている。

唯　「帰ろっか。」

秀人　「そうだな。」

秀人、唯、出口に向かい歩き始める。

秀人　「カラオケでも行くか！」

唯　「行くー！」

（終）